

みなみ みよう じ ちょう
南 妙 法 寺 町

同名の村が長らく併存

江戸時代の初め「南妙法寺村」と呼ばれた当地が、寛文―元禄年間（一六六一―一七〇三）に「妙法寺村」と改称しています。当時、同じ妙法寺を名乗る村が現在の檀原市域北部にあつたため、このあと一地域に同名の村が長く並存することとなります。明治一三年に南の村が南妙法寺村と改称し同一七年に北の村も北妙法寺村となり、同名村の南北併存が解消します（北妙法寺町Ⅱ参照）。

明治一五年ごろの南妙法寺村は、戸数二五戸・人口一三三人（町村誌集）で、同一七年前ごろの主産物は―米・裸麦・さつまいも・ぶどう―などでした（農産物取調表）。明治二二年に白檀村の大字となり昭和三年に畝傍町大字になったあと、同三一年の檀原市発足でいまの「南妙法寺町」が生まれました。

隣の高取町と境を接するこの町は、貝吹山（二一〇・三メートル）北東ふもとの谷あいに位置しています。町なかの坂道を山へ上る中ほどに浄土真宗本願寺派の徳応寺があり、さらに上ると春日神社（旧村社）に至ります。

神社拝殿奥の玉垣に囲まれた中に、神木の榊（さかき）一本が植えられています。この神木に宿る神様を拝むという古い神社形式のため、神殿の見当たらない珍しいお宮さんです。